

女子大学生の出産に対する意欲と関連する心理的要因

太刀川 ハルナ^{*}・石丸 径一郎^{**}

Psychological Factors for Female University Students' Willingness to Bear Children

Haruna TACHIKAWA^{*}, Keiichiro ISHIMARU^{**}

Abstract

Many of developed countries experience baby bust phenomena. While some social factors have been identified, such as low wages, busyness of everyday life, and delayed marriage, there is not enough research on individual and psychological factors for baby bust. This study explores the psychological factors in female university students. One hundred thirty students responded questionnaires comprised of preferred number of children, narcissism, gender role attitudes, and preference for work-life balance. The mean of preferred number of children was 1.48. The major correlate for higher preferred number of children was narcissism such as self-confidence, needs for praise, and activeness. Traditional gender role attitude had some relationship for higher preferred number of children. Importance of considering psychological factors such as narcissism and gender role attitudes was discussed when addressing baby bust phenomena.

Keywords: willingness to bear children, baby bust, narcissism, gender role attitude

1 問題と目的

1.1 少子化現象の社会的要因と心理的要因

2019年12月24日に厚生労働省が発表した2019年の人口動態調査の年間推計から、日本の国内出生数は1899年の統計開始以降初めて90万人を下回る約86万4千人となったことがわかった(厚生労働省, 2019)。日本の少子化対策は、合計特殊出生率が1966年の丙午を下回ることになった1989年の「1.57ショック」を契機に1994年に策定されたエンゼルプランから始まり、働き方改革による、待機児童解消、東京一極集中の是正と地方創生など、様々な計画が策定・施行されてきた。また2019年10月から10%に引き上げられた消費税を財源として、幼児教育と高等教育の無償化など2兆円規模の政策の施行が決定されている。しかしこういった対策に関わらず、出生数は予測を上回る速度で減少している。

キーワード：出産意欲，少子化，自己愛，性役割態度

^{*} お茶の水女子大学生生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座 2019年度卒業生

^{**} お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系准教授

出産意欲は何によって規定されるのだろうか。国立社会保障・人口問題研究所の第15回出生動向調査では、夫婦の予定子ども数が理想子ども数を下回る理由として最も多く回答されたのが経済的な理由であり、これは妻の年齢が35歳未満の若い層に顕著に見られた。また予定子ども数を実現できない可能性についての理由としては「年齢や健康上の理由で子どもができないこと」が最も選択率が高かった（国立社会保障・人口問題研究所、2017）。守泉（2019）の女性の無子に関する研究では、初婚年齢の遅れや乳幼児とのふれあい経験の少なさが無子になるかに関わっていることが示されている。また松浦（2016）が「消費生活に関するパネル調査」を用いて行った研究では、無条件下での追加希望子ども数に関しては、収入、労働時間、家事時間といった個人属性の影響を受けると述べられている。少子化に関する研究では、このように経済的な要因や時間的な余裕の無さ、晩婚化などいけば社会的要因が注目されがちである。しかし、教育の無償化や子育て家庭に対する経済的な支援を充実させた国が、必ずしも少子化問題を解決できているわけではない。ベビーボーナスや保育サービス、外国人メイド控除などの制度があるシンガポールの合計特殊出生率は日本より低くなっている。ネウボラや入りやすい保育園など充実した社会保障と、父親の育休取得率が高く、ジェンダーギャップ指数で上位にランクインするフィンランドも減少傾向にある。

少子化の個人的・心理的要因に関する研究は、社会的要因についての研究と比べると少ない。松田（2007）の行った育児不安と追加出産意欲の関係の分析では、母親の育児不安が高いほど追加出産意欲が有意に低いことが指摘されている。また守泉（2019）は今後の研究課題として、理想・希望子ども数ともにゼロと回答する自発的かつ一貫した無子志向者と、結婚相手の不在や健康上の理由などで途中から無子となった非自発的な無子志向者の区別ができないことをあげている。

1.2 本研究の目的

本研究では、出産に対する意欲に関連する、個人の心理的要因について検討したい。自身や配偶者の年収などがはっきりしておらず、出産の経験がなく、そして本人の年齢が子どもを望まない理由にならない女子大学生を対象として、出産に対する意欲もしくは早い段階での無子志向に繋がる価値観や心理的特徴などについて探索することを目的とする。

研究仮説については次の通りとする。第一に、大学生の家族形成意欲について調査した齋藤他（2014）によれば、将来「結婚する」とした群ではほぼ全員に出産意欲があり、またこの群では家庭における性役割を肯定しつつ男女共同参画にも賛成を示すという、いわば2つの規範を内面化した回答の割合が高かった。また男女別の分析において、男性の結婚意思を規定する要因として「自分の性に生まれてよかった」という項目が有意な結果になった。このことから性役割については「性役割を肯定している、また自身の性別に対する肯定感を持っている女性がより出産に対しての意欲が高い」という仮説を立てた。

第二に、自己愛が強い者は、子どもが自分の自由を奪うと考える傾向をもち、その結果として無子志向になりやすいと考えられる。そこで自己愛については「自身のことを他人よりも優秀かつ個性的だと思っており、社会的に自身を評価されることを望む者のほうがキャリアを優先しようとするため子どもを望まない」とことを仮説とした。

第三に、少子化は先進国の社会問題であり、途上国や宗教的に女性が抑圧されている国の出生率は高いことから「今までの人生に対する主観的な幸福感や満足感が出産意欲に影響を与えない」という仮説を立てた。またこれと対比させる形で、相対的な自己肯定感並びに相対的な自身の将来に対する期待感と出産意欲との関係も検討することとした。

第四に、両親との関係について、まず良好な関係を築けていること、そして両親を見て将来の結婚後の生活に希望を持てることが、子どもを持つという意思に影響を与えられられる。そこで「父親と似た価値観の男性を夫としたいと思う、また母親のことを将来自分が母になったときのロールモデルとしたいと思う女性のほうが、結婚後・出産後の生活を具体的かつ魅力的に思い描きやすいため出産意欲が高くなる」という仮説を立てた。

2 方法

2.1 手続き

都内の女子大学在学学生を中心として、未婚で出産の経験のない女子大学生及び女子大学院学生を対象に質問紙調査を行った。調査時期は2019年8月下旬から2019年11月上旬までであった。質問紙への回答はGoogle Formsを用いて行った。対象者に対して、直接調査のURLを送ったり、もしくは対象者のスマートフォンで調査者が提示したQRコードを読み取ってもらったりすることで回答フォームへ誘導した。調査の依頼は、授業の中で案内したり、SNSにて知人を通じ広く募ったりという方法を取った。調査の中で大学名は尋ねていないが、お茶の水女子大学に在籍する学生の割合は半数強程度ではないかと推測される。

2.2 質問紙の内容

質問紙全体の構成は次の通りであった。

(1) フェイスシート①

研究参加への適格基準判定のための質問項目で、性別、年齢、大学生もしくは大学院学生かどうか、未婚かどうか、出産経験の有無から成る。これらの設問で、「女性」「大学生、大学院生」「未婚」「(出産経験)ない」以外の選択肢を選んだ回答者は、以降の設問に進めないようにした。

(2) 希望子ども数と第一子出産時の希望年齢

この時点で回答者が女性しかいないことを前提として、将来回答者自身が何人子どもを産みたいと考えているかを、0から「6人以上」までの7択で質問した。また0以外と回答した人にはさらに、第一子を出産したい年齢についてもあわせて尋ねた。

(3) 生活重視割合

生活の中で、仕事、趣味、家庭の3つそれぞれをどの程度重視しているかを尋ねた。回答者には大学もしくは大学院卒業後の人生について想像してもらい、「仕事」「趣味」「家庭」の3種類の行動にどの程度時間を割きたいと思うか、合計が100%になるように数値で回答を求めた。ここでは仕事を「会社員や経営者、フリーランスなど労働形態に関わらず、金銭的報酬を得ることを主な目的とした行動全般」、趣味を「スポーツや読書、デートなど、楽しさや快楽を得ることを主な目的とした、金銭的報酬が発生しない行動全般」、家庭を「家事や育児など、世帯を共にする自分以外の人間の生活ために行う、金銭的報酬が発生しない行動全般」と定義した。

(4) 自己愛人格目録短縮版(NPI-S)

自己愛人格目録短縮版(NPI-S)は小塩(1999)によって作成された自己愛傾向を測定する尺度である。因子数について複数の意見があり、男女によって因子構造が異なることが報告されていたNPI日本語版(大石・福田・篠置, 1987) 54項目の中から、男女に共通する3因子「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」に対応する、より平易な30項目から構成されている。回答は「とてもよく当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの5件法で求めた。

(5) 平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)

平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)は40項目からなるSESRAフルスケールから、“個人レベルにおける男女平等”という概念を定量化する15項目が抽出された短縮版の尺度である(鈴木, 1994)。回答はリッカート式の5段階尺度で求めた。

(6) 人生に対する満足尺度

人生に対する満足尺度は、“自ら選んだ基準に基づく、過去 - 現在 - 未来にわたる人生の主観的評価”を測定する角野(1994)による5項目を用いた。回答は「全くそうではない」から「全くそうだ」までの7件法で求めた。

(7) 両親との関わりや自己評価について

その他の質問項目として、自身の性別についての2項目「生まれる前に戻って自分の性別を好きに選ぶことができるとしても、今と同じ性別を選ぶと思う」「来世があるなら、今とは違う性別に生まれ変わりたい」、父親との関係について2項目「私は父親と良好な関係を築けていると思う」「私が結婚することになったとき、夫となる男性は私の父親とは話が合う人だと思う」、母親との関係について2項目「私は母親と良好な関係を築けていると思う」「私が母親になったとき、一番の手本にするのは自分の母親だと思う」、自身の現在と将来についての相対的な評価について2項目「人間の価値を点数化したとき、私は平均点は超えていると思う」「大学もしくは大学院卒業後は、平均よりは良い人生が送れると思う」の計8項目を尋ねた。最初の6項目は、齋藤他（2014）の調査で使用された項目を参考に、自身の性別についてどう思っているか、両親それぞれに対してどう思っているかについて尋ねる設問として作成した。また最後の2項目は、主観的な評価を測る人生に対する満足尺度とは別に、自身についての相対的な評価を尋ねる設問として追加した。これら8項目はNPI-Sと同様の5段階評価で回答を求めた。

（8）フェイスシート②

最後に、フェイスシート①で尋ねていない回答者の属性について尋ねた。きょうだいの数、世帯収入、回答者が小学生の時の母親の職業、回答者が中高生の時の母親の職業、現在の母親の職業、出身地の6問からなる。

2.3 統計的分析と倫理的配慮

まず希望子ども数別に群分けし、各尺度と項目について平均を比較した。次に子供を希望する群としない群の2群に分けてロジスティック回帰分析を行い、求められたオッズ比から出産に対する意欲を規定する要因を分析した。また、生活重視割合の数値に影響する要因について、「家庭」と「趣味」を目的変数とし、既存尺度NPI-SとSESRA-S、人生に対する満足尺度、さらに両親との関わりや自己評価の8項目を説明変数としてAICの値によるステップワイズ法の重回帰分析を行い、「家庭」及び「趣味」と関連する要因を分析した。これらの分析はR version 3.6.1とEZR version 1.41を併用して行った。

本研究は無記名調査なので、研究計画と調査内容について説明した後自由意志で調査に参加してもらい、回答を送信することをもって研究参加への同意を得られたものとした。本研究は、お茶の水女子大学に置かれた人文社会科学研究所の倫理審査委員会による、学部生による研究に関する方針に沿って行われた。

3 結果

3.1 基礎的集計

有効な回答が得られた130名のデータを分析に使用することとした。参加者130名の平均年齢は21.05歳であり、18～19歳が32名、20代前半が91名、25歳以上が7名であった。将来の希望子ども数は、0人希望が42名、1人希望が7名、2人が62名、3人が17名、4人と6人以上希望が1名ずつだった。希望子ども数の平均は1.48人だった。これは2018年の日本の合計特殊出生率1.42と0.06ポイント差である。パーセンテージでの回答を得た生活重視割合について、仕事は平均42.29、標準偏差14.69、趣味は平均27.79、標準偏差14.72、家庭は平均29.72、標準偏差15.29となった。分布を考慮して、以降0人群と1人以上群の2群に分けて分析を行う。

3.2 質問項目や心理尺度の項目分析

NPI-Sの天井効果(データの分布が右に偏り、ある得点以上の測定能力がなくなること)は項目5「私は、みんなからほめられたいと思っている」だけに見られた。先行研究の通り3因子構造になるかを確認するために、因子数を3としてプロマックス回転による因子分析を行った。その結果、先行研究では第3因子「自己主張性」の因子負荷量が最も高かった「いつも私ははなしているうちに、話の中心になってしまう」

と「私は、どんなことにも挑戦していくほうだと思う」の2項目が、別の因子にも高く負荷したり、どの因子にも高い負荷量を持たなかったりと、先行研究とは異なる結果となった。しかし比較可能性を考慮して先行研究と同じように各因子に10項目ずつに分けて下位尺度の得点とすることとした。各因子の素点合計は、第1因子「優越感・有能感」は平均28.75 標準偏差7.78、第2因子「注目・賞賛欲求」は平均30.90 標準偏差7.56、第3因子「自己主張性」は平均30.73 標準偏差7.41、NPI-S 総得点の平均は90.37、標準偏差は17.20であった。

Table 1 希望子ども数の有無による平均得点の差

項目	群	平均値	標準偏差	p 値
家庭(%)	0 人群	17.50	12.36	0.00
	1 人以上群	35.55	13.07	
趣味(%)	0 人群	37.74	17.01	0.00
	1 人以上群	23.05	10.82	
NPI-S 全体	0 人群	84.74	18.63	0.01
	1 人以上群	93.06	15.99	
NPI-S 優越感	0 人群	23.21	8.71	0.00
	1 人以上群	30.43	6.76	
NPI-S 賞賛欲求	0 人群	28.19	7.55	0.00
	1 人以上群	32.18	7.30	
SESRA-S	0 人群	66.79	5.18	0.00
	1 人以上群	61.82	9.18	
両親との関わりや自己評価 1 今と同じ性別を選ぶ	0 人群	3.21	1.46	0.02
	1 人以上群	3.82	1.35	
4 父親と合う人と結婚	0 人群	2.52	1.17	0.00
	1 人以上群	3.27	1.30	
5 母親と良好な関係	0 人群	3.86	1.32	0.01
	1 人以上群	4.40	0.89	
6 母親を手本にしたい	0 人群	2.69	1.46	0.00
	1 人以上群	3.65	1.32	
7 自身は価値がある	0 人群	2.57	1.38	0.00
	1 人以上群	3.67	0.94	
8 卒業後、良い人生	0 人群	3.07	1.35	0.00
	1 人以上群	3.78	0.96	

SESRA-S と人生に対する満足尺度は1因子として使われるため、天井効果及び床効果と信頼性係数の確認をした。天井効果と床効果(データの分布が左に偏り、ある得点以下の測定能力がなくなること)について、人生に対する満足尺度の5項目では見られなかったが、SESRA-S では項目8「子育ては女性にとって一番大切なキャリアである(逆転項目)」, 13 問目「女性はこどもが生まれても、仕事を続けたほうがよい」, 14 問目「経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてよい(逆転項目)」以外の12項目に見られた。SESRA-S の15項目と人生に対する満足尺度5項目についてクロンバックの α 係数を確認した結果、全て0.80以上であった。SESRA-S と人生に対する満足尺度の総得点の平均はそれぞれ63.42と22.19、標準偏差は8.38と6.10であった。

両親との関わりや自己評価については、まず天井効果と床効果を確認したところ、項目5「私は母親と良好な関係を築けていると思う」にのみ天井効果が見られた。相関が予想される組み合わせである性別に関する項目1と項目2、父親に関する項目3と項目4、母親に関する項目5と項目6、自身の相対的評価に関する項目7と項目8それぞれに中程度以上の有意な相関が確認された。

3.3 希望子ども数についての分析

まずフェイスシートと希望子ども数以外の測定項目の結果の平均値を希望子ども数0人群と1人以上群の2群で比較し、結果が $p<0.05$ 水準で有意なもののみをTable 1に示した。将来1人以上の子どもをほし
いとする女子大学生は、生活の中で家庭を重視する割合が高く、趣味を重視する割合が低かった。また自己愛については「優越感」「賞賛欲求」が高く、自己愛の総得点についても高かった。性役割態度は伝統志向的であった。そして、生まれる前に戻れたとしても今と同じ女性として生まれることを望み、父親と話が合うような男性と結婚したいと望み、母親とは良好な関係を築いていると感じ、母親になるとしたら自分の母を手本にしたいと思い、自分自身は平均よりも価値があると感じ、卒業後は良い人生を送れる
と思っていた。

次に2群に分けた希望子ども数を目的変数としたロジスティック回帰分析を行った。NPI-Sの質問項目30問を説明変数として投入したところ、Table 2に示す8項目が採用された。またSESRA-Sの15項目を投入した結果、項目8と項目15の2項目が抽出された。両親との関わりや自己評価についても同様に分析した結果、Table 3に示す6項目が採用された。最後に生活重視割合の数値について、そのまま投入すると多重共線性が出てしまうため、3つの中の順位を点数化した新たな数値を分析に用いた。具体的には、仕事50%、趣味30%、家庭20%という回答の場合、単独一位の仕事を2点、趣味と家庭を0点と変換する。また仕事10%、趣味45%、家庭45%という回答だった場合は、同率一位の趣味と家庭それぞれを1点、仕事を0点とした。順位化生活重視割合の仕事、趣味、家庭の3つを投入した結果、家庭と趣味が採用された。

Table 2 希望子ども数の有無と自己愛・平等主義測定項目との関係

項目	係数	標準誤差	オッズ比	95%CI	p 値
(自己愛)					
11 周りの人が私のことを良く思ってくれないと、落ち着かない気分になる	0.40	0.22	1.49	0.98-2.28	0.06
12 私は、自分で責任をもって決断するのが好きだ	-0.45	0.25	0.64	0.39-1.04	0.07
15 私は、どんなことにも挑戦していくほうだと思う	0.81	0.33	2.24	1.18-4.27	0.01
20 ここというときには、私は人目につくことを進んでやってみたい	0.55	0.24	1.73	1.07-2.79	0.03
22 私に接する人はみんな、私という人間を気に入ってくれるようだ	0.53	0.27	1.70	1.00-2.91	0.05
27 私は、自分独自のやり方を通すほうだ	-0.55	0.27	0.58	0.34-0.98	0.04
28 周りの人達が自分のことを良い人間だと言ってくれるので、自分でもそうなんだと思う	0.87	0.29	2.38	1.34-4.22	0.00
30 私は、個性が強い人間だと思う	-0.61	0.26	0.54	0.33-0.91	0.02
(平等主義)					
8 子育ては女性にとって一番大切なキャリアである	0.82	0.22	2.26	1.47-3.48	0.00
15 家事や育児をしなければならぬから、女性はあまり責任の重い、競争の激しい仕事をしないほうがよい	0.62	0.30	1.85	1.02-3.35	0.04

Table 2 と Table 3 について、それぞれの項目は「まったく当てはまらない」から「とてもよく当てはまる」までの5段階で尋ねているが、その個人の回答が1段階「とてもよく当てはまる」に近づくと、そのオッズ比の倍数分、将来子どもを1人以上持ちたい方の群に入る確率が上がることを示す。例えば「11 周りの人が私のことを良く思ってくれないと、落ち着かない気分になる」について1段階上の回答をした場合、その人が将来子どもを持ちたいと思う確率が1.49倍に上がるという結果である。また「12 私は、自分で責任をもって決断するのが好きだ」について1段階上の回答をした場合、その人が将来子どもを持ちたいと思う確率が0.64倍に下がるという結果である。順位化した生活重視割合については、回答が1点上がるごとに、オッズ比の倍数分の確率で、子どもを持ちたいと思うということになる。

Table 3 希望子ども数の有無と、両親との関わりや自己評価・生活重視割合との関係

項目	係数	標準 誤差	オッ ズ比	95%CI	p 値
(両親との関わりや自己評価)					
1 生まれる前に戻って自分の性別を好きに選ぶことができるとしても、今と同じ性別を選ぶと思う	0.25	1.23	1.29	0.94-1.77	0.12
3 私は父親と良好な関係を築けていると思う	-0.42	0.20	0.66	0.44-0.99	0.04
4 私が結婚することになったとき、夫となる男性は私の父親とは話が合う人だと思う	0.57	0.22	1.76	1.15-2.70	0.01
6 私が母親になったとき、一番の手本にするのは自分の母親だと思う	0.35	0.17	1.42	1.02-1.98	0.04
7 人間の価値を点数化したとき、私は平均点は超えていると思う	0.84	0.21	2.32	1.54-3.48	0.00
(生活重視割合)					
家庭 (順位)	2.06	0.69	7.82	2.02-30.30	0.00
趣味 (順位)	-0.80	0.29	0.45	0.26-0.78	0.00

希望子ども数の有無とフェイスシート②で尋ねたきょうだい数、世帯収入、母親の職業との関係を検討するためにフィッシャーの正確検定を行った。その結果、小学生の頃の母親の職業だけ有意な差が見られた($p=0.02$)。そこで小学生の頃の母親の職業について、「フルタイム」「パートタイム」「自営業・家族従業者」「専業主婦」の4つの新たな区分を作成し、また「その他」または「不明」と回答した2名を削除した128名のデータを用いてフィッシャーの正確検定を行った結果、やはり小学生の頃の母親の職業のみ有意な結果が得られた($p=0.00$)。各区分の中で子どもが1人以上ほしいと思っている人の割合はフルタイム20名の中で75.0%、パートタイム37名の中で73.0%、自営業・家族従業者10名の中で20%、専業主婦61名の中で65.6%であった。Tukeyの多重比較の結果。その結果、「自営業・家族従業者」と「フルタイム」、「自営業・家族従業者」と「パートタイム」、「自営業・家族従業者」と「専業主婦」との間に有意な差が見られた($p<0.01$)。

4 考察

4.1 考察

まず人生に対する満足尺度を説明変数として行った分析では、有意な結果は得られなかった。このことから、人生に対する主観的な幸福感や満足感子どもを持とうと思うかどうかとの関連が見られないと言える。

次に自己愛について、下位尺度と項目ごとに結果をまとめていく。まず第3因子「自己主張性」に含ま

れる項目である「15 私は、どんなことにも挑戦していくほうだと思う」のオッズ比は2.24であった。このことから、積極性やチャレンジ精神がある女性のほうが出産や子育てにも挑戦していく傾向があると考えられる。また他の項目「12 私は、自分で責任をもって決断するのが好きだ」「27 私は、自分独自のやり方を通すほうだ」「30 私は、個性が強い人間だと思う」のオッズ比は1よりも低い結果となった。この結果から、出産に対して積極的な女性と、会社での出世やペイドワークでの自己実現に対して積極的な女性では、「自己主張性」という性格の面で差がある可能性が示唆された。第1因子「優越感・有能感」第2因子「注目・賞賛欲求」に含まれる項目の結果から、無子希望者よりも出産に意欲のある者のほうが「人から注目されたい、人から評価されることで自分のことを良い人だと思えることができる」という傾向が強いことが読み取れる。以上の結果から「自身のことを他人よりも優秀かつ個性的だと思っており、社会的に自身を評価されることを望む者のほうがキャリアを優先しようとするため子どもを望まない」という仮説は支持されなかった。

平等主義性役割態度については総得点のオッズ比は0.87と、男女平等を支持する女性のほうが、やや子どもを望まない傾向が見られた。また生活重視割合の順位化点数による分析では、「家庭（順位）」のオッズ比は7.82倍と今回有意になったオッズ比の中で最高値となった。「家庭」を2位以下とした回答者よりも「家庭」を1位とした回答者のほうが、8倍近く子どもを欲しいと思う確率が高くなるというこの傾向と、NPI-S、SESRA-Sの結果をまとめると、伝統的な性役割観を支持し、仕事よりも家庭に重きをおいている、高い有能感と賞賛欲求を持つ女性が子どもを持つと思う確率が高いことがわかった。「趣味（順位）」のオッズ比が今回有意になったオッズ比の中で最低値の0.45と低くなったのは、個人主義傾向が無子希望傾向に影響していることを示唆する結果と言えるだろう。「仕事（順位）」では有意な結果が得られなかった。

次に、両親との関わりや自己評価に関する項目について考察する。項目7「人間の価値を点数化したとき、私は平均点は超えていると思う」のオッズ比2.32は、NPI-S下位尺度の結果とも一致している。有意な結果が得られなかった人生に対する満足尺度のことを含めて考えると、主観的な幸福感や満足感よりも相対的な優越感や自己肯定感のほうが出産に対する意欲に影響を及ぼす可能性がある。項目1「生まれる前に戻って自分の性別を好きに選ぶことができるとしても、今と同じ性別を選ぶと思う」のオッズ比と、齋藤他（2014）の研究で結婚意思を基準変数とした男女別の多重ロジスティック分析で使用された「自分の性（男または女）に生まれてよかったと思う」のオッズ比とを合わせて考察すると、自身の性についての肯定的な考え方は、女性の結婚意思には有意な影響は与えないが出産意欲には影響することが示唆された。また項目6「私が母親になったとき、一番の手本にするのは自分の母親だと思う」の結果から、自身の母親を母として理想的なロールモデルだと考えている女性がより出産に意欲を示すという仮説は支持された。

フェイスシートに関する分析から、きょうだいの数や世帯収入は出産意欲に影響を与えていないという結果が得られた。母親の職業について、母親が家にいる時間の多さや家庭外で働いている姿などが子どもの出産意欲に影響すると予想されたが、小学生の頃の母親の職業が自営業・家族従業者の場合にのみ有意な結果が出た。しかし、小学生の頃の母親の職業が自営業・家族従業者だったと回答した者の数が少なかつたため、結果の解釈には注意する必要がある。

今回の分析の結果から、出生率を上げるためには伝統的な性役割観を復活させることがよいとは、人権や社会正義の観点からもちろん言えない。1960年代から人口抑制政策を行っていた韓国やシンガポールが人口抑制政策から出産奨励政策へ転換した後も合計特殊出生率が伸びない、むしろ下がっているといった現状を見れば、一度広まったものと逆の考え方を再度浸透させるのは難しいだろう。五十嵐（2009）によると、ペレストロイカ期のソ連でも、効率化の進展に伴う失業者対策と出生率の改善のために女性を家庭に帰す政策がとられるようになったが、その後もロシアの女性の就業率は約過半数を維持している。しかしそれと同時に、保育の無償化や家事のアウトソーシング推奨、育休制度の整備といった男女平等を支持

する女性のための少子化政策について、効果が出ているとは考えられない、もしくは結果が長続きしていない国も見られる。伝統主義的な性役割態度を持っている女性において出産意欲が高かったが、このような態度の中のどの要素が出産意欲に結びついているかを詳細に検討し、人権や社会正義を損なわない範囲での政策のあり方を探ることも、検討の余地があるかもしれない。

本研究の限界としては、研究参加者の偏りと、サンプルの小ささ、質問の内容の3点があげられる。まず調査対象の偏りについてだが、今回の参加者の多くは1つの女子大学の在学学生であり、都市部という地域的な面、学力的な面、育った家庭の社会経済的地位の面などで、結果が偏っていた可能性が考えられる。また対象を女性に絞ったため、子どもを希望する性格傾向の男女差の比較ができなかった。サンプルサイズについては、予想以上に希望子ども数が0人と2人に集中したこともあり、分析が無子志向群と子どもを希望する群の2群の比較にとどまった。希望子ども数1人群と3人以上群の比較など、より多くの子どもを希望する人の特徴や要因を明らかにする分析ができるだけのサンプルサイズの取得が今後望まれる。

引用文献

朝日新聞 DIGITAL (2017). 自民の山東氏『4人以上産んだ女性、厚労省で表彰を』

<<https://www.asahi.com/articles/ASKCP5RL8KCPUTFK017.html>> (参照 2019-12-29)

五十嵐 徳子 (2009). 旧ソ連の共和国で大量の専業主婦は誕生するのか 比較経済研究, 46(1), 17-34.

井土 亜梨沙 (2019). 最高レベルの子育て政策も無駄? : 急減するフィンランドの出生率

<<https://forbesjapan.com/articles/detail/30270/2/1/1>> (参照 2019-12-29)

角野 善司 (1994). 人生に対する満足尺度 (the Satisfaction With Life Scale [SWLS]) 日本版作成の試み 日本教育心理学総会発表論文集, 36(0), 192.

国立社会保障・人口問題研究所 (2017) 2015 年社会保障・人口問題基本調査(結婚と出産に関する全国調査) 現代日本の結婚と出産 : 第15回出生動向基本調査(独身者調査ならびに夫婦調査) 報告書

<http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_reportALL.pdf> (参照 2019-12-29)

厚生労働省 (2019). 令和元年(2019)人口動態統計の年間推計

<<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikai19/index.html>> (参照 2020-3-1)

松浦 司 (2016). 出産意欲のパネルデータ分析 中央大学経済研究所年報, 48, 1-14.

松田 茂樹 (2007). 育児不安が出産意欲に与える影響 人口学研究, 40, 51-63.

守泉 理恵 (2019). 日本における無子に関する研究 人口問題研究, 75(1), 26-54.

日本経済新聞 (2019). 出生率 86 万人に急減, 初の 90 万人割れ : 19 年推計

<<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO53727740U9A221C1MM8000/>> (参照 2019-12-29)

大石史博・福田美由紀・篠置昭男 (1987). ナルシズム的人格の基礎的研究(1) : ナルシズム的人格目録の信頼性と妥当性について 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 534-535.

小塩 真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, 8(1), 1-11

齋藤 幸子・星山 佳治・内山 絢子・近藤 洋子・原 美津子・宮原 忍 (2014). 大学生の家族形成意欲と関連要因に関する調査研究 : 男女共同参画社会に向けた若者への支援について 厚生指標, 61(5), 15-22.

産経新聞 (2019). 女性の活躍に関する意識調査,

<<https://www.sankei.com/economy/news/190424/prl1904240568-n1.html>> (参照 2019-12-29)

鈴木 淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, 65(1), 34-41.

